

1) 1996年NTTテレビ電話を14台使用しD⇔P遠隔医療を行った(電気通信財団研究費)

① まともに機能したのは1年間に1回だけであった(人工呼吸器の呼気弁の取替えについて)

② P→Dでは医師の勤務時間あるいは24時間の「いつでも対応」体制が必須である

③ D→Pでは患者側の日常生活を侵食し反発を招く(はだか・下着を干す・時間を決めて用意等)

④ 患者から「不要・引き取ってくれ」と言われ回収

2) 2003年県神経難病連絡協議会がFoma25台購入。5台でD⇔P遠隔医療施行

① 2年間で一回も連絡が来なかった

② 通常電話で全て対応できた

③ 現在Fomaを持っている家庭がかなりあるが一度も画像が必要だったことはない

④ 緊急時の「家庭内の対応」を事前に指示しておけばあわてない

⑤ 在宅医の養成が第一。在宅医の代替にすると、いつまでも「医者は行かない・看取らない」